

---

# 雪道十歩

鈴架ゆずる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪道十歩

### 【Nコード】

N0193P

### 【作者名】

鈴架ゆずる

### 【あらすじ】

俺は人生で一番楽しく、悲しかったあの夏の日を忘れることはないだろう。何年も経った今、俺はあの村で昔のことを鮮明に思い出していく。親友の最初で最後の悲しく、大きな裏切りが今の俺を生かしている。この物語は俺、神崎之道があの夏、村で出会った暖かな人々や優しい日々、そして、一生忘れることのない悲しい出来事を綴る物語である。

## ブローグ　雪の中で

晴れやかな空だった。

直視するにはあまりにも眩しすぎる十二月半ばの冬空を見上げる。

雪が道の表面をすべて覆い、周りは辺り一面見事な雪景色。

車を村の入口看板があった場所に止めて、一歩一歩村の中へと進んでいく。

舗装されているこの一本の道だけ、村から分離されたように感じるのは今でも同じだ。

不意に庭らしき場所を覗けば、季節を間違えてしまった綺麗で哀れな夏の花が一輪、雪の表面から顔を出している。

まるでその花だけ、あの夏の日から時間が止まっているような気にもなった。

ただただ何もない雪道を、自分の足音だけが聞こえるままにまた歩き続ける。

無音の白い世界を歩いていると自分だけ、どこか違う世界に取り残されたような気分にもなってくる。

この村に俺が居たのは、蝸がせわしくなく鳴いていた夏。

あの夏とは天地がひっくり返ったと言ってもいいほど、この村は変

わってしまった。

いや、この場所を村と呼んでいいのかそれすらも疑問に思う。

人の気配すら感じさせないほど閑静で、どこか不気味とさえ思ってしまう。

目を閉じれば、この村で出会った何十人もの優しかった人々の顔が今でも鮮明に思い出することができる。

それほど、俺にとってこの村の人の存在というのはとても大切だった。

一つ一つを順番に思い出していく内にいつも最後にいきつくのは、俺に最高の思い出をくれた親友の顔だ。

でも、彼がした最後の裏切りを俺は何度も憎み、何年もの月日を経た今でさえ、俺に大きな傷跡を残している。

あの裏切りから数ヶ月は、夜がくるたびに何度も泣いて、何度も自分を追い詰めたくらいだ。

けれどそれと同時に、彼の最後に見た笑顔を忘れることは一度もなかった。

彼がいなければ、俺は今頃この晴れやかな空を見ることはなかっただろう。

けれど決して、俺はあいつに礼なんか言わない。

裏切られて、俺はこんなにも長い間苦しめられているのだから謝りにこい。

いつものようにどこからともなく現れて、笑って俺の前に出てくればいい。

そうしたら俺は、笑ってお前を許してやることができる。

その願いが叶うのなら、自分を殺してやってもいい。

けれど、どんなことをしても俺の願いが叶うことはない。

それに、お前はそんなこと願わないこともわかってる。

そんな馬鹿なことをする余裕があるのなら、自分が出世する努力でもするんだな、と

皮肉っぽく、けれど俺のためを思ってお前なら笑ってそう言うのだろう。

足しげく通ったお前の家を見上げながら、俺は今お前を思い出している。

俺がこの村で過ごした日々はとても暖かくて、優しくて、切なかった。

人生で一番楽しく、人生で一番辛い思いをしたあの夏の日を一生忘れない。



## 第一章 山奥の村（１）

その日はいつにもなく晴れ晴れとした大空が広がっていた。

まるでこの地に立ち入ることを（俺は決して嬉しくはないが）歓迎されているよう  
だ

移り変わる景色をただ何も考えずに眺めながら、今日は実に暑そう  
だ、どうしたらこの暑さから気を紛らわせることができるかとそん  
などうでもいいことばかり、ぼんやりと考えていた

助手席ではラジオから流れる今時の流行の音楽を揚々と歌い上げる  
父と、そんな父にガムを渡す母の光景が目に入る。

時間が経つにつれて、高層ビルやマンション、ファストフード店な  
どいつも見慣れていた建物なんかは完全に流れる景色からは消えて  
いた

あるのは緑、緑、緑

地元の人たちしか利用しないであろうスーパー

また緑、緑、緑

けれど、いつまでも似たような景色を眺めているのも嫌いではなかった

広大の緑の土地は山の向こうまで広がっているようだ

その景色を見て感動なんてものはなかった

ただこの土地で一生暮らすなんて真似俺には出来ないな、と思う

一息つき、視線を遠くの山から近くの脇道に逸らす

「（あ、いまその脇にいたのは狐だろうか）」

今し方通り過ぎた何かがいた場所を覗きこもうとしたが、父の「之道」という呼びかけにそれは叶わなかった



「あと1時間くらいたったら婆ちゃん家に着くぞ」

斜め後ろの体制で振り返る父と一時目が合うがすぐに逸れる。

「でも之道を1カ月もお義母さんのところに預けるなんて大丈夫かしら」

母も斜め後ろの体制で俺をちらりと見やる。俺は窓の外の景色に視線を合わせたまま。

「なに田舎で不便な点が多いが、自然はたくさんあるぞ。之道くらいの年齢ならそういう自然にたくさん触れておくべきなんだ」

長旅だったと言いながら嬉しそうな父。やはり自分の故郷だからだろうか

今、俺たちが向かっているのは父方の祖母の家だ。

母方の祖父母は俺が生まれるのと同時期に二人とも亡くなっている。

「之道もおばあちゃんの家にも1ヶ月も滞在するなんて不安じゃない？」

「別に…」

「本当いつからこんなに無口になっちゃったのかしら…」

「まあまあ。男の子なんだし、そんな時期もあるさ」

父と母が何かを笑って話しているのは微かに聞こえたが、急激に意識は奥深く吸い込まれていき、俺の肩をゆさぶる母の声で目を覚ましたのは、それから約1時間後のことだった。

主に着替えしか入っていないスポーツバッグを肩にぶら下げて、停

車した車  
のドアを片手で開ける

その瞬間にぶあつと熱気が押し寄せて、くらっと目眩のような感覚が押し寄せる

それまで快適空間の中で悠揚と数時間過ごしていた俺にこの気温差はいささか辛い

「暑いわねえ……」

「さすがというべきか……懐かしいよ。よく爺さん婆さん連中が日射病にかかってたっけな」

「笑い事じゃないわよ馬鹿」

暑い暑いと言いながらも楽しげに話して歩く父と母の後ろから数歩下がってついて行く

車を停めたすぐ脇には、古ぼけた看板が立っており読めなさそうで読める字で『古森村』と書かれていた。

周りを見渡しても知らない景色、土地、馬や牛などの家畜

「さっきの話じゃないが…急に之道を1ヶ月も預けてほしいなんて母さんも何考えてんだか」

「やっぱり不思議よね。でもまあ、たまには滅多に会えない可愛い孫と一緒に過ごしたいんでしょ」

「そういえば、之道と婆ちゃんまだ2回しか会ったことないか」

そう、俺は自分の祖母にあたる人と二回しか会ったことがない

一度目は俺が小学校に入学する前。けれどその時の記憶はほとんどない。

二度目は四年前だが、祖父の葬式の会場だったから話すとかそういう状況ではなかった。

けれどその中でも鮮明に覚えていることは、自分の夫の死を目の前にして最後の最後まで涙を見せない祖母の姿だった。

「ほら、ついたぞ」

「本当に何も変わってないわね」

そう言いながら慣れた手つきで玄関の鍵を開けて入っていく父と母

「ほら、之道も早く来い」

「ああ……」

俺もそれに続こうとしたが、

「……？」

何かが、誰かがいる気配がする。

誰だろう、村の人かな。

まさかこんな時代に、真昼間から、旅人の金目を盗もつかさうい  
う思考回路の奴がいるわけじゃあるまいし

嫌な予感がする方向を俺はゆっくりと振り返る。振り返る

「あ……」

そこには軽く息切れを起こしている俺と同年くらいの、男が立っていた

その目はしっかりと俺を見ており、まるで追いかけて走ってきたかのような

なんだこいつ……気味悪い

よそ者は歓迎しないと、今時そういうのなのか？

そういうのにはかかわらないのが一番だ。

俺は無視を決め込もうとしたときだった

「之…道…っ？」

「え…」

その男の口から出てきた名前はまさしく俺の名前で、一瞬背中が凍りつく

「（なんで…）」

何故俺の名前を知っている、と目線で訴えていると男は次第に俺のほうへ駆け足で寄ってくる



そして男はかなり怖い顔、というか絶望に満ちたような顔をしながら俺より視線が高い位置から見下してくる

「…本人か？」

「そつだと言ったらどう… …っ!？」

不意に手首を強引に掴まれたことに動揺し、どうするんだと言いかけた口は止まった

「之道来い!!」

「は…っ?」

「いいから！見つかる前に！！」

俺は祖母の家に入ることなく、なぜか俺の名前を知るこの知らない男に腕を引つ張られたまま…林の中へ走ることになってしまった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0193p/>

---

雪道十歩

2010年12月29日20時52分発行